

『旅立ちの日に』と出会った学校の前に勤務していた学校の前には、卒業式に出たことがないので、どんな歌が歌われていたのか覚えていない。私は、卒業式が行われている最中も外にいて、警備という仕事をしていた。あの頃は、そんな時代だった。『旅立ちの日に』が生まれた影森中学校と似た状況だった。

『旅立ちの日に』と出会った学校では、教務主任として卒業式の司会進行を務めたことがあった。途中までは何事もなく進行できていた。ところが、卒業生の『旅立ちの日に』を聞いてからは、もうだめだった。どうにもこうにも涙が止まらない。結局、泣きながら、その後の進行をすることになってしまった。式が終わってから、卒業生の保護者が、うれしそうに「先生、泣いていましたね」と声をかけてくる。次の年もまた進行役であるにもかかわらず泣いてしまった。

校長として赴任した小学校では、卒業式でどんな歌を歌うのかと職員会議の資料を見てみると、『旅立ちの日に』であった。卒業式の練習が始まり、卒業生の『旅立ちの日に』を聞いた。練習だというのに、私はすでに泣いてしまった。その小学校の卒業生は、たったの2名なのである。その2人が一生懸命歌うのである。当日は、涙をこらえるのが大変だった。助かったのは、校長式辞などの私の出番が終わっていたことである。

『旅立ちの日に』と出会った学校では、卒業式当日になると、多くの女子生徒が泣いてしまい、声が出ない。しかし、男子生徒の素敵な声が体育館中に響き渡る。2年生の合唱コンクールでは、満足に声を出さなかった男子生徒が、最後の最後にすばらしい声を聞かせてくれる。きっと影森中学校でも同じようなことが起きていたことと思う。小嶋校長先生や坂本先生は、どのような思いをもってその歌を聴いていたのだろうか。

私は、『旅立ちの日に』を聞けば大抵泣く。それもピアノのイントロでもう涙腺が緩んでしまう。この曲には力がある。歌には力がある。この曲は、やさしく素敵なのだが、人を感動させる力を持っている。小嶋校長先生と坂本先生の思い、影森中学校の先生方と生徒、そして歌で立ち直った学校がもつ力だと思う。小嶋校長先生は、2011年に80歳で急逝した。この年は、『旅立ちの日に』が誕生して20年の節目の年だった。埼玉県は、小嶋先生に作曲者の坂本浩美先生とともに、「彩の国特別功労賞」を贈呈している。

2007年には、今となっては懐かしいSMAPが、NTT東日本のCM曲として歌ったことがあった。私は、このときは何も感じなかった。他にも何人かのアーティストが歌っているが、特段感じるものはない。『旅立ちの日に』は、卒業していく子どもたちが歌うからいいのである。学校で歌うからいいのである。

まもなく卒業シーズンを迎える。今年もまた、たくさんの『旅立ちの日に』が歌われることであろう。それぞれの学校のドラマとともに。子どもたちと先生方の結び付きとともに。そう考えると、一つとして同じ『旅立ちの日に』はないのかもしれない。

「いま 別れのとき 飛び立とう 未来信じて 弾む若い力信じて このひろい このひろい 大空に」